日本文化人類学会第 47 回研究大会（於　慶応大学三田キャンパス）
2013 年 6 月 8 日（土）10:30-11:00
B02

交錯する人脈、組み上げられる武装勢力
―シエラレオネ内戦にみるカマジョーの変容―

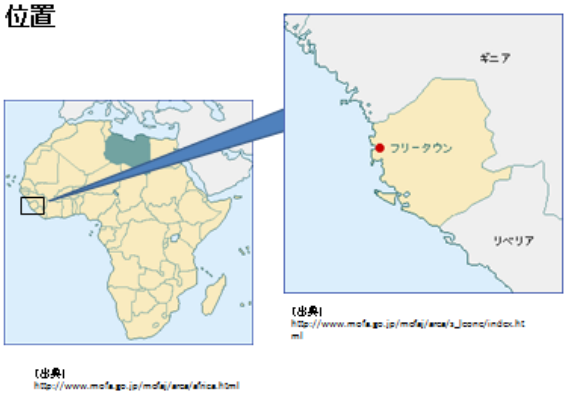
岡野英之
日本学術振興会特別研究員(PD)
大阪大学大学院国際公共政策研究科
okano.hideyuki@gmail.com

はじめに
（１）自己紹介と本報告の要旨

報告者は、かつて政治学の立場からシエラレオネ内戦について研究を進め、フィールドワークをおこなってきた[1]。とりあえず、シエラレオネの場所だけスライド示しておきます。

報告者は、シエラレオネ内戦に関する研究の過程で、人類学的な知見を踏まえなければ、自らの研究対象を理解できないと思い文化人類学を学ぶようになる。こうした立ち位置から、本報告では、国家を考察する政治学でも、ローカルを考察する人類学でも十分に考察されていないローカル・エリートに焦点を当てる。こうした人々はローカルを、ナショナルやトランスナショナル、あるいはグローバルな領域へと接合する役割を持っている。こうした人々が内戦中に行った実践を見ていこうというのが本報告の試みである。

地図1. シエラレオネの位置



（２）人類学における紛争研究と報告者の関心

まず、人類学において武力紛争を研究する意義について論じる。報告者は、武力紛争を理解するために国家に対する考察からローカルに対する考察へと重点を移してきました。一方、スーダン（現南スーダン）を研究する人類学者、栗本英世は内戦の中で生きる人びとを理解するために、国家の考察へと踏み込んでいった（栗本 1996, 2001）。その栗本は人類学者が武力紛争を考察する意義を以下のように述べている（以下はその要約）。

> 「未開社会」が消失してしまったいまや、人類学は「現代世界」を対象としている。そのため、「現代世界の諸問題」についての考察が迫られている。そのひとつが武力紛争である。武力紛争は、伝統的には国家が主体であったため政治学・国際関係論からアプローチされてきた。ミクロでローカルな次元の記述と分析に関わってきた人類学は、マクロな次元を語る言語を持ち合わせていないため、政治学・国際関係論からのアプローチを援用せざるを得ない。ただし、ローカルなアプローチを取ることでそれらの成果を批判的に検証し、修正することも可能である。　（栗本 2001、報告者による要約）

[1] シエラレオネでは共通語として英語クレオールであるクリオ語(Krio)が広く用いられている。そのため英語を介する者も多い。よって、シエラレオネの調査は英語および若干のクリオ語を用いて行った。また、隣国リベリアでも調査を行っている。リベリアではリベリア英語(Liberian English)が共通語として広く用いられているため、英語で調査を行っている。

本報告では、政治学アプローチで理解されてきた内戦の動態に対する理解を、ローカルなアプローチによってさらに掘り下げていくという作業を行います。その際に注目したのは、いかに人脈が機能しているかに関する政治学の議論です。

１．先行研究

（１）政治学における人脈ネットワークの議論

政治学には、アフリカ諸国では人脈ネットワークによって国家が運営されているという議論が見られる。こうした議論では、アフリカにおける国家は、官僚制や法制度といった公的な制度に則っておらず、私的な人脈ネットワークを通じて運営されていると理解されている[2]。そうした国家についての議論から、二つの人脈ネットワークについての議論を紹介します。

・バヤール(François Bayart)によるリゾーム上の人脈ネットワーク(Bayart 1993[1989])

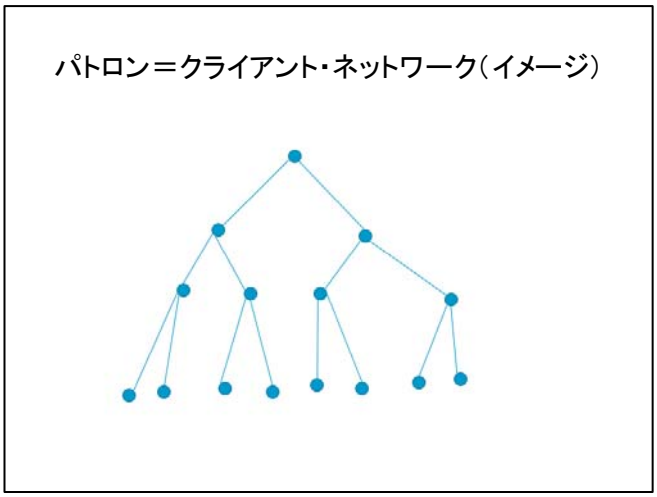
アフリカ諸国家では、なにか物事を行おうとするとき、人脈ネットワークが重要となってくる。その人脈の作られ方は、上下関係・制度・組織の制約なしに作られる。

> アフリカ諸国家では社会のあらゆる階層で人脈が繋がっている。その人脈の広がりは、中心も始まりも終わりもなく、多方に錯綜する地下茎[リゾーム]のようである。人と人とのつながりは、相互扶助集団、同郷会、友人・親族関係、政治・宗教・職業団体、同好会から商売上のつながり、バーでの飲み友達などあらゆる場所で形成される。そうした人脈に基づいて物事は進んでいた。国家の運営も同様である。

・武内進一による縦のネットワークについての議論（武内 2009）

アフリカ諸国家では、重層的なパトロン＝クライアント関係のネットワークを通じて国家の統治が行われているといいます。

> 国家はパトロン＝クライアント関係（親分＝子分関係）によって運営されている。影響力のもつ者（パトロン）は、資源を分配し、クライアントを動員する。誰かにとってのクライアントが誰かにとってのパトロンであることにより、パトロン＝クライアント関係は重層的に重なり、パトロン＝クライアント・ネットワークを構築している（PCネットワークと略称する）。PCネットワークは、為政者を究極のパトロンとすることで国家を維持する役割を担っている場合もある。



⇒武内の議論で注目したいのは、**パトロンは資源を分配することでパトロンとしての地位を保っている**ということ。

（２）人類学者による人脈ネットワーク研究とその問題点

政治学が行ってきた鳥の目の議論（すなわち、全体像を理解するための説明モデルの提示）を踏襲して、虫の目の議論をしたのが、人類学者のマッツ・ウタス(Mats Utas)[3]による編著である。この編著では、国家からローカルまでをつなげるPCネットワークの中に見られる「顔の見える関係」を描き出した論文が所収さ

---

[2] 人脈ネットワークはどの組織にもあるが、この議論で問題視しているのは、国家が制度にのっとって運営されていないことである。

[3] 彼の博士論文は、首都で暮らす元戦闘員の日常を描いた民族誌である(Utas 2003)。

れている(Utas 2012)。それらの論文では、紛争中、あるいは紛争後の社会における人脈ネットワークを、様々なレベルのパトロンに注目し、その実践を記述している。そこに提示されているのは人類学者が見てきた、ある時点におけるパトロンの役割についての記述である。しかし、その記述は静的であり、ある時点のものに過ぎない。

それに対して、本報告では、様々なレベルのパトロンが変化する状況にいかに対応するのかに注目することでPCネットワーク内の動態を論じたい。

なお、本報告のもととなるデータは2008‐2012年の間に毎年1～3か月の調査を内戦後のシエラレオネ、およびその隣国リベリアで行うことで収集した。

２．考察する出来事：　シエラレオネ内戦とカマジョー

本報告が考察対象とするのは、シエラレオネ内戦の中でローカルな自警団から政府系勢力へと拡大成長を遂げたカマジョー(Kamajor)である。シエラレオネ内戦は、反政府組織RUF（革命統一戦線：Revolutionary United Front）の侵攻によって1991年3月に開始した。RUFは学生運動の過激派に端を発する組織であり、民族を基盤とした勢力ではない。1994年頃からRUFはメンデ人(Mende)地域で村々を襲撃し、略奪や蛮行を繰り返した。それに対する自警のためにメンデ人[4]によって作られたのがカマジョー[5]である。カマジョーは、県(District)の下位区分である行政単位「首長区」(chiefdom)[6]を基盤として作られた。

西アフリカでは伝統的に秘密結社の慣行があるが、カマジョーとは、伝統的な狩人に着想を得て、内戦に対処するため新たに作られた新しい秘密結社である。カマジョーになるには、イニシエーターによる加入儀礼を経て、カマジョー結社の構成員になる必要があった。イニシエーターの役割を担ったのは呪医である。

首長区(chiefdom)を基盤として作られたカマジョーは形成された当初、大首長(paramount chief)をはじめとした首長区の指導層（「伝統的権威」(traditional authority)と呼ばれる）のリーダーシップのもと、自警活動に従事していた。しかし、内戦が長期化する中で、カマジョーは政府（カバー政権という特定の政権）[7]に取り込まれ、政府系勢力として組織化されていく。

地図 2.　シエラレオネにおけるメンデの分布域

（出典：http://www.lib.utexas.edu/maps）

２．本報告での考察する「出来事」

本報告の考察対象期間は、1997年5月25日から1998年3月25日までである。考察期間の始点である1997年5月25日は、軍事クーデター「525事件」が発生し

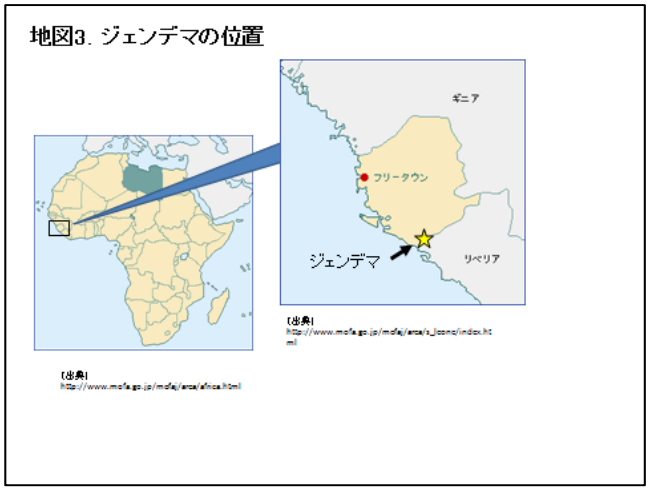
---

[4] シエラレオネにおけるメンデ人の人口は、約146万人とされ、シエラレオネの人口の約30%を示す。また、隣国リベリアにも2万人ほど居住している（赤坂2000）。シエラレオネの東部、南部に多く居住する。メンデ人の主要な生業は農耕でありコメを主食とする。主に陸稲栽培が行われているが、水稲栽培もおこなわれる(Bleadsoe and Robey 1986)。その他、キャッサバ、ヤム、トウモロコシ、オクラ、マメ類、トウガラシ、トマトを作っている。19世紀前半には、多くの首長国が林立していた（小川1988）。

[5] 人類学によりカマジョーの研究で最も多くの論考を発表しているのはダニー・ホフマン(Danny Hoffman)である。紛争中に現地調査を開始した。その場に居合わせたカマジョーの活動に対する民族誌的記述を行う。内戦中の一コマを描くという点で重要な貢献をしている(Hofman 2011)。また、ナタリー・ウロドルチェック(Nathalie Wlodarczyk)はカマジョーの呪術的な側面に注目している。その分析は、呪術が内戦においていかなる役割を有しているのかを分析としている(Wlodarczyk 2009)。その他にも、伝統的狩人と内戦中のカマジョーの関係を論じた研究としてFerme（2001）やFithen and Richards（2005）がある。

[6] シエラレオネの首長区については以下の文献を参照。落合2008

[7] アフマド・テジャン・カバー(Ahmad Tejan Kabbah)大統領とする政権。内戦中に実施された民政移管に伴う総選挙により大統領に選出された（1996年3月）。カバーはシエラレオネ人民党(Sierra Leone People’s Party)の党首である。シエラレオネ人民党はメンデ人の首長層を支持基盤とする。



た日である。このクーデターによって政府と反政府勢力 RUF の対立は、「軍事政権・RUF」vs「カバー政権・カマジョー・カマジョーに軍事支援を与えるナイジェリア軍」という対立に変化する。

自警団として首長区で設立されたカマジョーは、それぞれ独立して活動する存在であった。カマジョーはそうしたメンデ人の自警団の総称に過ぎない。525 事件までに一部のカマジョーは対 RUF 戦のためにカバー政権から支援を受けていた。その中には国軍と共同作戦をとったものもいる。

カバー政権からの支援は代理首長サムエル・ヒンガ・ノーマン(Samuel Hinga Norman, Regent chief)が、カバー政権の閣僚となったことで拍車がかかった（以下、「ノーマン首長」と表記[8]）。国防副大臣[9]の彼は国軍の資金や物資をカマジョーに転用したのである。

525 事件は、そうしたカバー政権に対して反感を持った国軍の一部が起こしたものである。525 事件を契機に成立した軍事政権は、反政府勢力 RUF を共同政権運営者として迎え入れることで内戦の終結をはかる一方、カバー政権の下にあったカマジョーの解散を命令する。

カバー政権は 525 事件により転覆し、隣国ギニアで亡命政権を樹立した。それを契機に、カマジョーはシエラレオネ国内にて、カバー政権側の勢力としてまとまりを見せることになる。隣国リベリアとの国境沿いの町ジェンデマ(Jendema)に集まったカマジョーは、軍事政権との戦いの中で中心的な役割を負った。それまで独自に活動する数あるカマジョーの部隊のひとつにしか過ぎなかった彼らは、シエラレオネ政府、軍事支援を提供するナイジェリア軍[10]、リベリアにいるメンデ人ディアスポラからの支援を得て軍事政権との戦闘を継続することになった。以降、彼らを「ジェンデマ・カマジョー」と呼ぶことにする。

ジェンデマ・カマジョーの活動を起点とし、カマジョーの活動は広がりをみせ、それは軍事政権の打倒へと繋がる。ナイジェリア軍との共同で実施された 1998 年 2 月の大規模な軍事作戦により、カマジョーらは軍事政権および RUF を首都から追いやった。それを受けて 1998 年 3 月 15 日にカバー大統領は復帰する。カバー政権が復帰した後、カマジョーは政府系勢力として組織を整備し、全国に拡大していくことになる。

・<u>対立関係</u>

カマジョー カバー亡命政権 ナイジェリア軍		軍事政権＋RUF （本報告では「軍事政権」と総称）

以降は、ジェンデマ・カマジョーが活動の中心であった時期に作られた人脈が、その後の内戦の展開にいかに作用しているかを、数人の人物に注目することで確認する。

３．考察：　ジェンデマで繋がる人脈

（１）エディ・マンサレー(Eddie Mansalley)

この人物はジェンデマに集まったカマジョーのリーダーである。彼はラジオを通して軍事政権と対峙することを最初に表明した人物のひとりである。彼は 525 事件後、ラジオで軍事政権と対立することを表明し、すべてのカマジョーにジェンデマへ集まるよう呼びかけた。その結果、独立して活動していたそれぞれのカマジョーの部隊は、一部の戦闘員をジェンデマへと派遣した。

---

[8] この表記はカマジョーがサムエル・ヒンガ・ノーマンを”Chief Norman”の愛称で呼ぶことに準じている。
[9] 国防大臣はカバー大統領が兼任。
[10] ナイジェリア軍は、準地域機構「西アフリカ経済共同体」(The Economic Community Of West African States: ECOWAS)が派遣した平和維持軍「西アフリカ諸国経済共同体監視団」(ECOWAS Monitoring Group: ECOMOG)（「エコモグ」と呼ばれる）の名で介入している。

この頃、首長区の自警団であるカマジョーは各地で統合され始め、大きな集団を形成するようになっていた（こうしたカマジョーの集まりを「カマジョー部隊」と便宜的に呼ぶことにする）。エディはそのうちのひとつのカマジョー部隊でリーダーだった。報告者のインタビューによると、その部隊は国軍とともに行動し、対 RUF 戦に従事していた。

このカマジョー部隊は、当初、国境を越え、リベリアで難民となるためにジェンデマへと向かったという。しかし、そこで戦闘を継続することになった。「我々は戦う基地をつくるためにジェンデマに来たわけではない。そこがリベリアへと至る最後の地だったから基地を作ったに過ぎない」というカマジョーの声もある。当時、リベリアでは内戦が終結しつつあった。国境では平和維持軍としてナイジェリア軍が国境警備にあたっていた[11]。国境警備が強固であるため、軍事政権も国境を越えてカマジョーを追えなかった。

カマジョーは、リベリアをセイフヘブンとし、軍事政権との闘いを継続した。

（２） 軍事政権との闘いでのジェンデマ・カマジョーの取り組み

① ナイジェリア軍との接触により軍事支援を引き出し、リーダーとしてノーマン首長を呼び寄せた。

- ナイジェリア軍はカバー政権を支持し、軍事介入を行った。カマジョーは、リベリアに駐屯するナイジェリア軍とコンタクトを取り、軍事支援を引き出した（食料や軍事物資の要請を無線で行うと、ナイジェリア軍が車で持ってきた）。軍事物資は、各地にいるカマジョー部隊へと提供された（各地から徒歩で取りに来た）。
- ナイジェリア軍に依頼し、活動の正当性を保つためにギニアへと亡命していたノーマン首長をリベリアへと呼び寄せた。それにより、ジェンデマ・カマジョーは、他のカマジョーの部隊にノーマン首長の直属の部隊とみなされるようになった。

以下はそのことを語るエディ・マンサレーの証言である

> 「我々は「参謀長殿(“Chief of Staff”)」宛てのレターを持ってモンロビアの ECOMOG 本部〔ナイジェリア軍が主体となる平和維持軍〕に行った。軍事支援をほしいと要請しに行った。しかし、君たちの大統領とのコンタクトが取れるまでは支援はできないとのことだった。その数日後、ECOMOG はジェンデマまでやってきた。カマジョーのリーダーに会いたいというのだ。俺や〔そのほか数名〕が名乗りを上げ、ECOMOG 本部まで行った。（そして、支援が約束された）。…ECOMOG は政治家を巻き込みたくないといった。しかし、我々はノーマンを指導者として迎え入れたいと強く要求した。ECOMOG はカバー〔亡命政権〕と連絡を取った。その日のうちにチャーター機でノーマンは来た。」
>
> （エディからの聞き取りを要約。同様の内容を複数の幹部が証言）

② リベリア人戦闘員の動員

- 525 事件が発生した時、リベリアでは第一次内戦[1989-1996]が終結したばかりであった。カマジョーは、その元戦闘員を吸収した。

③ カマジョーの組織化と効率化

従来、カマジョーは、チーフダムや村に基づいて編成されていた。それを作戦部・後方支援部・実行部隊に役割分化し、組織の効率化を図った。以下はその組織概略。

> 作戦部：Director of War の下に、Principal Deputy of Director of War, Deputy Director for Operation, Deputy Director for Planning and Special Operation
> 後方支援部：人事、諜報、ロジスティックス、軍事訓練、福利厚生、医療サービス、広報の各部門担当者を設置。
> 実行部隊：ジェンデマ全体で大隊(Battalion)を構成（1000 人ほど）。中隊、小隊へと区分。

＊ カマジョーの加入儀礼をおこなうイニシエーターも、国内にいることに危険を感じ、ジェンデマへと集まった。それまでイニシエーターは独自の社と、その警備のための独自の部隊を持っていた。しかし、ジェンデマでは、社をひとつに限定し、イニシエーターが独自の部隊を持つことは許さなかった。イニシエーターはジェンデマをベースとし、各地に派遣された。その派遣により、各地のカマジョーは増員が可能であった。

---

[11] ナイジェリア軍は、西アフリカ各国から構成される国際機関、西アフリカ経済共同体が派遣する平和維持軍、西アフリカ経済共同体停戦監視団(Economic Community of West African States Monitoring Group: ECOMOG)の主力をなしていた。

⇒本報告では、この中でみられる人脈を見ていく。エディを取り巻く、人脈として数人を選んだ。その経験を見ると、以下の結論が得られる。

様々なレベルのパトロンは、現状に対する打開を図るために既存の人脈を利用する。その過程で、これまでは無縁であった人々が接合されていく。それを繰り返すことで、PC ネットワークは組み替え続けられる。その中である者は、地位を下げ、ある者は地位をあげる。

それをほりさげていくと 4 つの要素に分けることができる。

① パトロンが資源を得て、それを用いてクライアントを獲得していくさま。
② リゾーム状の人脈ネットワークから人員が PC ネットワークに吸収されるさま。
③ PC ネットワークは国境を越えるさま
④ PC ネットワークが組み替えられるさま。

（3） 軍事政権との闘いで広がっていく人脈

・ノーマン首長

カマジョーにおける究極のパトロン。資源の獲得先を変えることでパトロンとしての地位を保つさまが確認できる。

ノーマンは、かつて、ひとつの首長区でカマジョーを率いる代理首長であった。シエラレオネ国軍において従軍経験があった彼は自らの首長区でカマジョーを率いて対 RUF 戦で成果を収めた。その成果と名声によってカバー政権の国防副大臣と地位を得る。その後は、その立場を利用し、各地のカマジョーに軍事物資の支援を行っていた。こうした取り組みによりノーマンは名目上、カマジョー全体のリーダーと見なされるようになっていった。しかし、525 事件によりカバー政権が転覆し、カマジョーのリーダーとしての地位を失いかけていた。

ジェンデマ・カマジョーのリーダーであるエディは、自らのカマジョー部隊の正当性を担保するため、ナイジェリア軍を介してノーマン首長を呼び寄せた。エディに呼び寄せられることにより、ノーマン首長はリーダーの地位を保つことができた。ナイジェリア軍からの軍事物資の提供を、自らの名のもとで各地のカマジョー部隊に提供したからである。

1997 年 10 月頃、ノーマンは、シエラレオネ内陸部から物資を取りに来たあるカマジョー部隊からオファーを受けた。リベリアが平和を取り戻し、国境警備が強固になり、カマジョーの活動がしにくくなっているため、内陸部に拠点を移さないかというオファーである。このオファーを行ったカマジョー部隊は、ノーマンがかつて重用していたイニシエーターが率いていた。ノーマンはそのオファーを受け入れ、新たな基地「ベースゼロ」を作った。ナイジェリア軍はヘリコプターを用い、ベースゼロに直接軍事支援を行うようになった。もはや必要としなくなったクライアント・ネットワークであるジェンデマ・カマジョーをノーマンは捨てたといえる。

地図4. ベースゼロの位置

（出典）http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/s_leone/index.html

・モハメド氏（仮名）

ノーマンの PC ネットワークに取り込まれる人物をノーマンとつなげた人物。リゾーム状の人脈ネットワークの一人。彼がノーマンに紹介した人物が、その後、ノーマンの PC ネットワークに取り込まれていった。

モハメド氏はリベリアに住むメンデ人である。

モハメド氏とノーマンの関係は 1970 年代前半までさかのぼる。ノーマン首長はかつてシエラレオネ人民党(Sierra Leone People's Party)のシンパであり、一党独裁政権期に不当な逮捕で拘束されたことからリベ

リアへと亡命した。モハメド氏も同じくシエラレオネ人民党のシンパであり、別の経緯でリベリアへと亡命していた。ちなみに、シエラレオネ人民党の支持層は首長層であった。モハメド氏も首長の家系に属する。

シエラレオネ人民党は、一党独裁政権期に解散したが、1990 年代に復活し、カバー政権を輩出した。525 事件を契機にノーマン首長がリベリアに渡って来た時、モハメド氏は自らの経営する自動車会社のオフィスを提供し、カマジョーを支援する団体を設立した。その団体は「民主主義復興運動」(Movement for Restoration of Democracy)という。民主主義復興運動は、アメリカにいるシエラレオネ人ディアスポラを通して資金を得た。その資金を元に、酒やタバコ、一部の食糧など軍事支援から得られないものを購入し、ジェンデマへと届けた。また、SUV 車を数台購入した。その車は、首都＝国境間の移動や戦闘に用いられた。ノーマンがベースゼロに移転した以降、モハメド氏は、カマジョーの活動には関与していない。

しかし、モハメド氏がノーマン首長のために始めた民主主義復興運動に参加した何人かの人物はノーマンの PC ネットワークに取り込まれていく。その事例が以下の二人の人物である。

・ムスタファ・ルメ氏(Mustapha Lumeh)

国境を越え、ノーマンの PC ネットワークに入り込んだ人物。ノーマンの腹心となることで PC ネットワークでの自らの地位を上り詰めていく。

ルメ氏は、モハメド氏の始めた民主主義復興運動に参加した。メンデ人ではあるが、リベリアでリベリア人として NGO を管理していた。

上述のモハメド氏は、民主主義復興運動の活動の中で、資金を慎重に、合議に基づいて運営したかった。それに対して、ノーマンはカマジョーのリーダーである自分に資金の運営の決定権があると主張したという。モハメド氏の態度に業を煮やしたノーマンは、当初財政を担っていたモハメド氏から通帳を取り上げ、その後の財政運営をルメ氏に一任したという。その後、ルメ氏はその手腕を買われ、ナイジェリア軍からの軍事支援の管轄も行うようになった。モハメド氏は「ルメ氏はノーマンにとってイエスマンであった」と語った。

ベースゼロが設立された時に、ルメ氏はノーマンとともに同行した。ベースゼロはシエラレオネの内陸部に位置し、読み書きができるものがほとんどいなかった。そこで NGO の運営経験のあるルメ氏がそのまま引き連れられ、ナイジェリア軍からの支援物資の管理にあたった。

その後、カマジョーの試みが成功し、カバー政権が復帰し、カマジョーが政府系勢力となった時、ルメ氏は引き続き物資調達の役割を担った。国家からカマジョーに渡される物資の分配権を握ったのである。

・スパロー（愛称）

ノーマンの PC ネットワークを国境を越えて拡大させた中レベルのパトロンといえる。また、のちにノーマンの政敵として台頭し、彼のクライアントを奪うことになった。

スパローはモハメド氏の息子である。リベリアで生まれた。スパローにメンデ語を習得させたいモハメド氏は、スパローをシエラレオネに送り教育を受けさせた（大学も卒業している）。ノーマンがリベリアへ来たことをきっかけに、スパローはカマジョーの「特別部隊」(Special Forces)の司令官(chairman)となった。「特別部隊」はリベリア人から成る部隊であった。カマジョーに入る前、スパローはリベリアの武装勢力に参加していた。その人脈を通じてリベリア人戦闘員を集めた。スパローは、首長の家系であることからカマジョーからの信頼も厚く、リベリアにも詳しい。こうした理由から特別部隊の長となり、リベリア人を率いることになった。

大半のカマジョーには実戦経験がなく、火器も不足していた一方、リベリア人戦闘員は戦闘経験があった。そのため、特別部隊はジェンデマ・カマジョーの勝利に大きく貢献した。また、特別部隊に参加していた戦闘員の中にはリベリア国軍出身者がいた。彼らの経験のもと、まず特別部隊が近代的な軍の体裁をとった。それが好成績を収めたため、ジェンデマ・カマジョーは組織化されることになった。

軍事政権が倒れ、カマジョーが政府系勢力となった後、スパローはノーマンの政敵となる。カバー政権は、ノーマンがカマジョーを自分の利益のために用いていることを問題視した。そこで、スパローを首都の基地の担当にした。ノーマンを介さずに、スパローを介して国家からの食糧や軍事物資をカマジョーに分配することによりノーマンの力を削ごうとしたのである。その結果、ノーマンの信望は薄れ、スパローの信望が増した。以前は 200 人ほどしかいなかったスパローの特別部隊は、戦闘員を　数十倍に増やすことになった。

結論

本報告では、従来、政治学で行われてきた人脈ネットワーク論を踏まえた上で、何人かの人物に焦点を当てて、彼らの持つ人脈ネットワークを考察した。それにより、カマジョーに見られる、ローカル、ナショナル、トランスナショナル、グローバルな次元が接合する中で組み替えられる人脈ネットワークの在り方を確認した。

政治学ではリゾーム状の人脈ネットワークおよび PC ネットワークという概念を提示している。人類学的考察は、政治学的アプローチではつかみきれなかったネットワークの動態を把握することができる。本報告 g が考察したようなローカル・エリートに注目すると、変化し構成員が入れ替わり続けながらも様態を保っている PC ネットワークの姿が確認できる。

武力紛争を考察する人類学者の中には、人々の考察から国家やNGOなどの考察へとシフトした者もいる（Alex de WaalやMark Duffield)。彼らは、考察対象がローカルではないため、もはや人類学者とは名乗らなくなっているものの、ローカルな場での出来事に注目した考察を行っている。また、研究対象地を理解するために国家へと注目し、国家に関する論考を書いた人類学者も多い(Richards 1996, Ellis 1999)。こうした研究動向が示すのは、武力紛争を理解するには、国家だけを考察しても、ローカルだけを考察しても不十分だということである。ただし、ここでいう国家とは、フーコー的な意味での国家の権力[12]を指すのでも、国家機構や制度を指すのではない。国家には、そこに所属し、影響力を持つ人物が所属している。そうした人物とローカルを接合させるのがローカル・エリートである。本報告ではローカル・エリートの考察を通し、国際政治・国家の政治・トランスナショナルな人々の関係、そして、メンデ人の「伝統」あるいは「文化」が入り混じるウォースケープ（Warscape）を提示した[13]。

最後に今後の課題を述べておく。カマジョーには大首長や呪医が深くかかわっている。カマジョーを論じる際、そうした人類学なトピックを論じることも重要である。そうした側面については別の機会に報告させていただきたい。

参考文献

Bayart, François
1993 *The State of Africa: The Politics of Belly*. London and New York: Longman.

Chabal, Patrick and Jean-Pascal Daloz
1999 *Africa Works: Disorder as Political Instrument*. Oxford: International African Institute in association with James Currey.

Debos, Marielle
2008 "Fluid Loyalties in a Regional Crisis: Chadian 'Ex-Liberators' in the Central African Republic," *African Affairs,* Vol. 107, No. 427, pp. 225-241.

Ellis, Stephen
1999 *Mask of Anarchy: the Destruction of Liberia and the Religious Dimension of an African Civil War*. London: Hurst.

Ferguson, James
1994 *Anti-Politics Machine: "Development," Depoliticization, and Bureaucratic Power in Lesotho*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

---

[12] 例えば、Ferguson (1994; 2006)、ゴールドマン(2008)。

[13] ウォースケープとは、アパデュライ(Arujun Appadurai)の議論を受け、キャロライン・ノードストロム(Carolyn Nordstrom)が提示した概念である。アパデュライのいう「スケープ」（地景）とは、人類学が「グローバルなフロー」を考察する際に目を向けるべき着眼点として提示している（2004: 69)。アパデュライが注目したのは、民族、メディア、技術、資本、観念の5つの地景である。アパデユライによると、これらの地景は「流動的で不規則な形状」であり、「歴史的、言語学的、政治的に状況づけられた多様な行為者—国民国家や多国籍企業、ディアスポラの共同体に始まり、（宗教的であれ、政治的、経済的であれ）サブナショナルな集団や運動や、村落や近隣、家族といった親密で対面的な集団に至るまでの—に〔よってもたらされた〕屈折を受けてきた」という(68)。この議論を受けてノードストロムは、人類学者が注目すべき地景として「ウォースケープ」を提示した。ノードストロムによると、ウォースケープとは、社会的主体にとって、現実が不確実性に満ちている場合、「社会的な軋轢や生活の営み(life project)に見られる複雑で多面的な様相」が立ち現れる場(site)である(1997)。

2006　*Global Shadows: Africa in the Neoliberal Order*. Durham: Duke University Press.
Ferme, Mariane C.
2001　*Underneath of the Things: Violence, History, and the Everyday in Sierra Leone*. Berkley, Los Angels, London: The University of California Press.
Fithen, Casper and Paul Richards
2005　"Making War, Crafting Peace: Militia Solidarities and Demobilization in Sierra Leone," in Richards, Paul (ed.) *No Peace, No War: An Anthropology of Contemporary Armed Conflicts*. Athens: Ohio University Press, Oxford: James Currey, pp. 117-136¥
Hoffman, Danny
2007　"The Meaning of a Militia: Understanding the Civil Defense Forces of Sierra Leone," *African Affairs*, Vol. 106, No. 425, pp. 639-662.
2011　*War Machines: Young Men and Violence in Sierra Leone and Liberia*. Durham: Duke University Press.
Muana, Patrick K.
1997　"The Kamajoi Militia: Civil War, Internal Displacement and the Politics of Counter-Insurgency," *Africa Development*, Vol. 22, Nos. 3/4, pp. 77-100.
Nordstrom, Calolyn
1997　*A Different Kind of War Story*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
Richards, Paul
1999　*Fighting for the Rainforest: War, Youth and Resources in Sierra Leone*. Oxford: James Currey, Portsmith: Heinemann.
Salehyan, Idean
2009　*Rebels without Borders: Transnational Insurgencies in World Politics*. Ithaca and London: Cornell University Press.
Utas, Mats
2003　*Sweet Battlefields: Youth and the Liberian Civil War*. `Ph. D thesis, Uppsala: Dissertation in Cultural Anthropology (DiCA), Department of Cultural Anthropology and Ethnology, Uppsala University.
Utas, Mats (ed.)
2012　*African Conflicts and Informal Power: Big Men and Networks*. London and New York: Zed Books.
Wlodarczyk, Nathalie
2009　*Magic and Warfare: Appearance and Reality in Contemporary African Conflict and Beyond*. New York: Palgrave Macmillan.
アッパデュライ，アルジュン
2004　『さまよえる近代―グローバル化の文化研究―』門田健一訳、東京：平凡社。
落合雄彦
2008　「シエラレオネにおける地方自治制度改革とチーフ」武内進一編『戦争と平和の間―紛争勃発後のアフリカと国際社会―』千葉：アジア経済研究所、251-278 頁。
栗本英世
1996　『民族紛争を生きる人びと―現代アフリカの国家とマイノリティ―』京都：世界思想社。
2000　「国家、パトロン・クライアント関係、紛争―現代アフリカ論の試み―」『NIRA 政策研究』第 13 号 6 巻、24-27 頁。
2001　「紛争研究と人類学の可能性」杉島敬志 編『人類学的実践の再構築―ポストコロニアル展開以後―』京都：世界思想社、102-122 頁。
ゴールドマン，マイケル
2008　『緑の帝国 ： 世界銀行とグリーン・ネオリベラリズム』山口富子監訳、京都: 京都大学学術出版会。
武内進一
2009　『現代アフリカの紛争と国家―ポストコロニアル家産制国家とルワンダ・ジェノサイド―』東京：明石書店。

〈発表要旨〉

交錯する人脈、組み上げられる武装勢力
シエラレオネ内戦にみるカマジョーの変容

岡野英之（日本学術振興会特別研究員 PD/大阪大学）

本報告では、西アフリカの小国シエラレオネで発生した内戦(1991-2002 年)において、各地の農村自治体で組織されたメンデ人自警組織「カマジョー」が、いかに形成され、変容し、ひとつの政府系武装勢力「市民防衛軍」(Civil Defense Force：CDF)となったのかを明らかにする。それを通じ、内戦に見られる、ローカル、ナショナル、トランスナショナル、グローバルな次元の接合を論じる。特に、その接合には人脈が大きな役割を果たしていることを指摘する。

シエラレオネ内戦は、1991 年、反政府勢力「革命統一戦線」(Revolutionary United Front: RUF)の蜂起によって始まった。11 年間続いた内戦は、7 万人の犠牲者、および、200 万人の避難民を生みだした。RUF は、ブッシュを移動することで、町や村に突然現れ、襲撃を繰り返した。

RUF は、しばしば、国軍の軍服で偽装し、襲撃を書けた。国軍と RUF の区別を失った住民は、自らの手で自分たちを守り始めた。「カマジョー」とは、内戦の中、農村自治体（チーフダム）によって組織されたメンデ人(Mende)の自警組織である。長期化する内戦の中で、カマジョーは、コミュニティを横断する形で統合・再編を繰り返し、徐々に組織として拡大していく。最終的には、メンデ人のみならず、他民族の自警組織をも組み込んだ政府系武装勢力 CDF を作り上げた。内戦末期には、大量の戦闘員を抱えた。CDF から武装解除を受けた戦闘員は、RUF のそれよりも多かった(以下、本研究の研究対象をカマジョー/CDF と表記する)。

いかにカマジョーは形成され、CDF へと形を変えていったのか。この問いに挑むことは、農村自治体、国家、トランスナショナルな影響が、いかに内戦の中で錯綜しているのかを理解することにもつながる。

シエラレオネ内戦についての研究蓄積は多い。その潮流は 3 つに分けられることができる。第一が、ローカルな側面に挑んだ、歴史人類学的アプローチである。このアプローチは、植民地統治から続く統治制度（チーフダム制度）が、シエラレオネの社会をいかにゆがませたのかを論じている。宗主国にチーフに任命された者が絶対的な権力を持った結果、農村社会に歪みが生じ、社会から締め出された若者が多く生まれた。そうした社会に居場所を失った若者が、反政府勢力 RUF の担い手となったとする(Fanthorp 2001, Richards 1996)。第二がナショナルな側面に挑んだ、政治学的アプローチである。このアプローチでは、縁故主義・腐敗・国家資源の収奪を特徴とする国家の在り方が内戦を導いたと論じている(Reno 1995, 1998,Richards 1996)。私的な人脈を通じ、経済的な利益で従属者をつなぎとめるという国家統治が、経済悪化により立ち行かなくなった結果、内戦が発生したと論じている (Reno 1995, Richards 1996)。第三のアプローチでは、トランスナショナルな影響を論じている。隣国リベリアでは、すでに内戦が勃発しており（第一次リベリア内戦[1989-96 年])、ひとつの武装勢力のリーダーが、シエラレオネで採掘されるダイヤモンドを求めて、シエラレオネの反政府勢力 RUF を作り上げたという理解である(Reno 1995)。

これらの研究は、たしかに内戦の一要因や一側面を描き出しているといえよう。では、それらの研究が描き出した、ローカル、ナショナル、トランスナショナルな影響は、いかにして関連しているのだろうか。

報告者は、内戦後のシエラレオネにおいて現地調査を行い、カマジョー/CDF の変容を明らかにしようとした。カマジョー/CDF の元戦闘員、元司令官、元幹部、基地のあった農村自治体の指導者層、政治家に会い、彼らに内戦期の個人史を語ってもらった。それを重ねることでカマジョーが形成され、変容するプロセスを理解しようとした。

その調査で報告者は、以下のことに気付いた。カマジョー/CDF で重要な役割を果たした人物たちは、ローカル、ナショナル、トランスナショナル、グローバルな人脈を有しており、それらを駆使することによって武装勢力を運営している。彼らは、人脈を利用し、現状に対する打開策を模索する。その過程で、これまでは無縁であった人々が接合されていく。接合された人脈は、重層的に重なり合い、新たな問題を生む。それを繰り返すことで、カマジョー/CDF へ変容してきた。

人類学でも、内戦、および、内戦の中の戦闘員についての研究蓄積は少なからず存在している（栗本 1996, James 2007, Peters 2011, Utas 2003)。こうした研究は、特定の集団、あるいは、特定の場所を調査対象として研究してきた。それに対して、報告者は、人脈のネットワークを調査の対象とした。本報告は、ミクロでローカルな次元が、いかにナショナル、トランスナショナル、グローバルな次元と接合しているのかを理解するひとつのアプローチを提示しうる。本報告は、「人脈の民族誌」を書く前段階としての口頭発表と位置づけることができる。

キーワード　内戦、武力紛争、シエラレオネ、人脈